

芦屋大学論叢 第73号  
(令和2年9月16日)抜刷

「いじめ撲滅劇」の参加が  
中学生の自己変容の転機として人格や進路に与える影響

—M-G T Aによる質的調査分析—

竹 内 和 雄  
富 田 幸 子  
安 東 茂 樹



# 「いじめ撲滅劇」の参加が 中学生の自己変容の転機として人格や進路に与える影響

— M-G T Aによる質的調査分析 —

竹 内 和 雄  
富 田 幸 子  
安 東 茂 樹

## 1 研究の所在と目的

教育課程における教科外の活動として特別活動がある。特別活動の領域には、学級活動・生徒会活動、学校行事が含まれており、児童・生徒は小中高校時代に集団で様々な行事や活動を体験する。大学生が過去を振り返った際、一番思い出に残るものとして上位にあげるのが「修学旅行」「部活動」「体育大会などの体育的行事」「文化祭・合唱コンクールなどの文化的な行事」であり（高瀬，2007）<sup>1)</sup>、普段の教室では見られない友人の一面を発見したり、新たな人間関係を育んだりする等、教科活動ではみられない有意義な活動の展開が概観できる。鈴木ら（2019）は、大学生を対象に特別活動と学級生活を基盤とする集団活動並びに人間関係づくりの関連を分析し、すべての特別活動の経験が「バランス型」のコミュニケーションへの有意に影響を与えていることを示唆している<sup>2)</sup>。

河本（2013）は、そうした特別活動に対して「単なる楽しかった思い出以上に記憶に残るからこそ、児童生徒の発達上、適応的な意味を持つ」と可能性を論じている<sup>3)</sup>。すなわち、そこで得た経験はただの一時の思い出で終わるのでなく、その後の生活に影響を与えるものであり、なかにはそうした経験がその後の人生における転機となるケースも考えられる。杉浦（2004）は「古い自己を脱ぎ捨てて新しい自己を作りあげる経験」を転機と位置づけ、過去を振り返った時「転機あり」と答えた群に、転機後の変化の特徴として「他人受容」「今の自分がある」「積極的行動」「自分らしさ」といった点がみられると述べている<sup>4)</sup>。このことから、転機を経験することは、これまでにない新しい生活、新しい自分との出会いが期待できるのである。

中学時代の活動の経験が転機となり、その後の生活に影響を及ぼすことが予想される取組として、A市におけるいじめ撲滅劇がある。これは、2007年度より12校の生徒会が参加し、活動を交流しあう中学生サミットという組織の中で、演劇という手段を用いて行う取組である。いじめ撲滅劇は、生徒会活動の一環として、市内の小中学生に向けていじめ撲滅のメッセージ伝達を目的としている。その結果、そこに参加した生徒の取組後に「いじめ観」や「他者との関わり」といった点での自己変容が見られることが明らかとなっている（富田，2020）<sup>5)</sup>。

中学生の時期は思春期であり第二次性徴期ともいわれる。心身のアンバランスが最も激しい時期であり、その時期を過ごす中学生はまだ揺るぎない価値観も形成できず、たえず他者の目を気にしながら生活する様相がみられる。そんな中学生の学校生活を脅かすものとして、いじめ問題があげられる。いじめは人の心に深刻な傷を与えるものであり、昨今はネット上でのいじめも加わり、教師も保護者も実態を把握しにくい状況がうまれている。そうしたいじめに対処するものとして、最近ではいじめが起こった後の当事者の子どもへの支援・指導からいじめ発生そのものを防ぐための予防教育という流れがあり（杉本ら，2017）<sup>6)</sup>、このいじめ撲滅劇もそうした流れをくむ取組である。

しかしながら、こうした学校での取組の検証として、事後においての変化や一定の効果を論じたものはみ

られるものの、保坂ら（2013）が「過去の集団関係でどのような体験をし、現在はどのような影響を受けているかという視点を検討した研究は見当たらない」<sup>7)</sup>と指摘するように、一定の期間が過ぎた後、活動を振り返り検証する研究は見当たらない。

そこで、本研究では、いじめ撲滅劇に参加して6年の時間経過をした卒業生を対象に、いじめ撲滅劇の参加が現在の生活や人格形成及び進路にどのように影響を及ぼしているかを検証する。「青年は過去の自分や経験、出来事を振り返りつつ、それらを再解釈したり再定義したりする」（都筑，2013）<sup>8)</sup>といわれるが、劇参加の6年前を振り返った時、彼ら卒業生にとって、いじめ撲滅劇の参加経験はどのような意味があるのか、転機ともいえるような影響を残しているのかについて明らかにしたい。

## 2 いじめ撲滅劇の概要

### 2.1 いじめ撲滅劇の誕生

2007年度、A市において生徒指導主事会の呼びかけにより生徒会活動を交流しあう「中学生サミット」という組織が立ち上がった。そこでは、年に2回、全12中学校の生徒会執行部が一堂に会し、各校における生徒会活動の交流を行った。その中学生サミットでの取組の一環として、年1回行われるいじめ撲滅劇の上演がある。いじめ撲滅劇の上演は、第3回中学生サミットの「A市からいじめはなくせるか」というテーマで行われた討論会での提起「人の心を揺り動かし訴えかける活動として演劇を上演しよう」を受けたもので、2018年度まで毎年上演された継続的な取組である。

### 2.2 いじめ撲滅劇の内容

森田（2010）は、いじめ場面には加害者・被害者・観衆・傍観者といった立場の四層構造が存在すると指摘している<sup>9)</sup>。今回取り上げる2009年度の「夕日の見える教室で」といういじめ撲滅劇（上演時間45分）では、いじめはダメだと思いつつも傍観せざるをえない生徒、いじめをはやし立てる生徒及びいじめを助長する生徒が存在する教室を舞台としている。

卒業式前日の放課後、体育大会でのリレーの失敗を契機にいじめの対象となり不登校となった女子の思いをクラスメートが知り、それぞれが自分のこれまでの歩みを振り返り、学級が新たな一歩を踏み出そうとするラストで幕がしまる。

表1 調査対象のいじめ撲滅劇参加卒業生の属性

番号	性別	インタビュー時の所属	出身 中学
A	男子	K大学工学部 3年生	B中
B	男子	H大学理学部 3年生	B中
C	男子	S大学医学部 2年生	A中
D	男子	K大学経済学部 3年生	A中
E	男子	K大学経済学部 3年生	A中
F	女子	T大学医学部保健学科 1年生	J中
G	女子	K大学経済学部 3年生	I中
H	女子	社会人 (弁護士から現在工場勤務)	K中

### 3 方法

#### 3.1 調査対象

対象となる卒業生は、インタビュー実施年度に成人式を迎えた大学生あるいは社会人であり、進路決定など人生の岐路ともいえる分岐点にさしかかる年代である。20歳と言う年齢は社会通念上では大人の仲間入りをする年で、これまでの人生を振り返り未来への展望を語る上でふさわしいと推察し、2009年度の劇参加者18名のうち8名にインタビューを実施した(表1)。

#### 3.2 調査期間

調査対象者は、インタビュー時、A市に住んでいない者も含み、2015年8月～9月の3日間で行った。

#### 3.3 調査手続き及びデータ収集上での配慮

2015年3月より卒業生にアポを取り、A市の中学校の図書室で、インタビュー(半構造化面接)を実施した。インタビューは1人30分から50分程度で、計322分45秒となった。インタビューの際にはメモをとることとビデオ撮影の許諾をとり、後日逐語化した。

収集するデータについては、いじめ撲滅劇の意義を明らかにし、今後の取組に生かしていく研究に使用するという趣旨を説明し、名前など個人が特定されないよう配慮する旨を伝えた。

#### 3.4 調査内容

劇参加より6年の時間経過があり、忘れていた内容もかなり存在すると予想された。そのため、いきなり劇の話題には入らず、今、大学生あるいは社会人として、どのような生活を送っているか、現在の生活からインタビューを始めた後、過去のいじめ撲滅劇への参加経験が今の自分に与える影響に関わる質問にシフトした。最後には将来に向けての展望についての質問を行った(表2)。また、質問にあたっては「そうした変化は、いじめ撲滅劇参加からの影響であると、自分自身考えられるか」という点をおさえた上でインタビューを実施した。

表2 いじめ撲滅劇参加卒業生への質問項目

質問①	今、大学(社会人)生活は、何かに打ち込むなど充実していますか? あるなら、それは、どんなことですか?
質問②	いじめ撲滅劇のことを今も覚えていますか? ア かなり強く覚えている。イ 強く覚えている。ウ まあまあ覚えている。エ あまり覚えていない。オ 全く覚えていない。
質問③	日常の中で、自分の周りにいじめを感じることはありましたか。もし、あったら自分はどのように対処しましたか?
質問④	いじめ撲滅劇参加は、今振り返ると自分にとってどんな意味があったと思いますか。 ・その後の生活で何か影響があったという点 ・役立った点 ・自分自身が変わった点
質問⑤	将来に向けて何か目標を持って頑張っていることはありますか? 自分は何を頑張りたいと考えていますか?

### 4 分析の手順及び配慮

今回の研究は、A市で行われたいじめ撲滅劇参加を経験した卒業生を研究対象としているため、ローカルな範囲における仮説的理論を作りあげるのに適しているといわれるM-GTA(修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ)によって分析する。M-GTAは、木下(2003)によって提唱された質的研究の方法で、データの解釈から説得力のある概念生成を行い、概念間の関連性を高め、まとまりのある理論を作るも

のである<sup>10)</sup>。具体的には、いじめ撲滅劇参加が卒業生に、どのような影響を与えたか、データに密着して解釈を進め概念を生成する。そのあとカテゴリー、そして上位カテゴリーにまとめていくM-GTAの一般的な方法で、以下のように分析を進めた。

1. 収集した全てのデータは1度に扱わず、インタビュー順に2~3人のグループに分け、3回のStepに分けて分析した。2. 1つのStepの分析の中で概念を抽出した後、前のStepのデータを追加することで新たな概念も抽出していき、最終のStepでは全てのデータで検討した。3. 分析では「劇参加による卒業生への影響」に関連する箇所を取り上げ具体例とした。4. 8名という人数であったため、具体例が1つしかない場合は概念として取りあげず、複数回(2つ以上)出てきた場合を概念として取りあげた。5. 抽出した概念で同じもの、類似したものがないかを見比べ、同じと判断される場合、1つのシートにまとめて記入し具体例を増やした。6. 生成した概念と他の概念の関係を検討し概念の似たもの同士をまとめ、そのまとまりに名前をつけカテゴリーとした。更に内容的に共通の上位概念で括れる複数のカテゴリーを1つの上位カテゴリーにまとめた。7. インタビューで、これ以上継続しても新たな結果が生まれない状況を理論的飽和とした。8. 分析の協力を、生徒会活動に関わる教師1名にも依頼し、概念を生成する際に概念の元になる具体例が他の概念の具体例と重複していないか等、教師2名でチェックした。

## 5 結果と考察

質的研究では、研究者自身の解釈が含まれ、結果と考察を分けて記述することが困難とされるため(木下, 2003)<sup>10)</sup>、初めに具体例に基づく概念とカテゴリーの分析結果をあげ、その後、概念間及びカテゴリー間での影響などの仮説プロセスと捉えられる結果と考察を記述する。

M-GTAの手法にのっとり、根拠となる具体例を元に抽出した概念を『 』で、その上に設けるカテゴリーを【 】で、更に最上位に設ける上位カテゴリーを《 》で記すものとするが、インタビュー分析からは12個の概念が見いだされた(表3)。なお、概念については、参加者のインタビューでの回答のうち代表的な具体例を「 」に記すと共に、概念の生成に関連する部分を波下線で記した。A~HのアルファベットはInfo. (データ提供者)に割り当てた記号である。

更に具体例「 」の中で、概念間やカテゴリー間での影響についての仮説プロセスと捉えられる箇所は、二重下線及び①~⑧の番号を示すと共に、結果図(図1)においてもその番号①~⑧と矢印で記した。

表3 M-GTAにより生成された概念一覧

手順	Info.	概念	概念数
Step 1	A.B.C	感情の高揚(達成感・感動) / ひとつの転機/ 他者との積極的な関わり/進路への姿勢/ 働く上でのやりがい/ いじめ観の定着	6個
Step 2	D.F.E	自信・自己肯定感/ 居心地の良さ/ 同一目標を掲げるメンバー/演じる面白さ/ 他者の気持ちの理解/ 意見の言える自分	6個
Step 3	G.H	なし	0個

## 5.1 分析

### 5.1.1 過去の参加経験による記憶

6年前の劇参加時の記憶に関連する具体例より、概念を5つ抽出した。それらは、同じ目的意識から生まれる特徴を示す『同一目標を掲げるメンバー』、周囲に対して自分を素直に出せる思いである『居心地の良さ』、劇発表後に感じた達成感・感動である『感情の高揚』、自分にはこんなことが出来たという思いを表す『自信・自己肯定感』、演じることの楽しさを表す『演じる面白さ』という5つの概念である。

『同一目標を掲げるメンバー』と『居心地の良さ』という2つの概念は、自分が受け入れられている思いと、共に行動できるという安心感を意味するものであるため【安心・受容的関わり】というカテゴリーに属するものとして捉えた。また、『感情の高揚』と『自信・自己肯定感』という2つの概念は、劇発表直後に感じた感動、達成感、自信などの感情を意味することから【ポジティブな感情】というカテゴリーに属するものとし、演劇の練習の中で感じた面白さや驚きといった感情を意味する『演じる面白さ』という概念は【演劇の有効性】というカテゴリーに属するものとして捉えた。

それら概念間およびカテゴリー間の動きとしては、①『同一目標を掲げるメンバー』での取組では活動をする者の中で価値観が近いことから『居心地の良さ』を生み出すと共に、②【安心・受容的関わり】という人間関係の存在する場が『感情の高揚』『自信・自己肯定感』という【ポジティブな感情】の喚起に影響をもたらしていることが伺われた。更に、③劇を実演する中で味わった『感情の高揚』が『自信・自己肯定感』に繋がっていることも伺われた。次にそれぞれの概念ごとに具体例を示す。

#### 『同一目標を掲げるメンバー』のもとになった代表的な具体例

- A：「修学旅行には行きたくないメンバーもいるけど、劇は同じ目標を持ってて、みんなで一丸となって、集中している感じが全然違う。高まり具合が違った。チームが一丸となっている感じ。」
- B：「中学とか小学校で、クラス単位でやるとやる気のない人とかが混じっていたりするけど、ああいう場にいったら全員が意識高いっていうのが凄く新鮮で、だから自分も頑張ろうと思ったりしてて。」
- G：「普通のクラスはたまたま集まっているだけでけど、劇のクラスは、同じ目標に向かって毎回集まっていた。サミットのメンバーとは、結構熱くしゃべった。劇を体験する前と後とでは（いじめなどの）意識が違ったし、練習がめっちゃ楽しかった。」

#### 『居心地の良さ』のもとになった代表的な具体例

- B：「同じ目的を持って生徒会とかいじめとか考え方が近いと、反感をかうこともないかなって思っ  
てて・・・劇のメンバーはみんなが自分に近く、接しやすいので安心感があった。」①
- F：「一人でもかけたらあの劇は成り立っていないし、完成を目指す上では誰もかけてはいけな  
いって感じ。そこのポジションに誰がいるからみんなの視線がいて・・・その経験・空気感が、居心地がいい  
と思ったし、自分の居場所が絶対ある。」

#### 『感情の高揚』のもとになった代表的な具体例

- F：「自分は最初出来なくて辛かったけど、先生が見捨てずに毎回アドバイスしてくれ、  
アドバイスも難易度があがっているのもわかり、こうして伸びていくんだなあ、今日はこれが出来たって  
感じで、先輩とも関係を作って自分も前進してて・・・あんな経験は今までなく毎回達成感があった。」②
- C：「今まではぼうっと何も考えず、無気力、無感動だったのに、劇を経験して自分で感動しよう  
みたいな意識ができた。3ヶ月みっちり練習して他の中学生とも関係を作れたのも大きかったし、  
劇は自分の人生で一番の感動ぐらいだった。感動というか、達成感が膨らんだのは間違いありません。」②

#### 『自信・自己肯定感』のもとになった代表的な具体例

G：「劇に参加して、すごい自信になった。凄い拍手をもらって感動したし、あの時、ああいうことをした自分って凄いなあって思いが残っているし、頑張れた自分に対する肯定感がありますね。」③

E：「今では、人前に立って喋れたりするかな。その時のあれ（劇の参加）で、僕自身、先生やみんなから褒めてもらって嬉しかったし、劇参加は、僕もちよっとやれば出来るんじゃないか、ここまで出来るんやなっていう自信にはなりましたね。」③

#### 『演じる面白さ』のもとになった代表的な具体例

C：「不良役を意識はしてなかったけど、なりきろうすれば、いやらしく言ったらいいとか、面白かったというか・、劇って視覚的聴覚的に頭に入りやすく、感動を与えるというかメッセージを与えるツールとして、いいと思う。」

F：「演劇をするってことは、人の立場に立つことで・、学校では、あのお茶らけ感の〇〇君が劇の中で豹変したのに凄くびっくりしたのを覚えている。」

以上、【安心・受容的関わり】【ポジティブな感情】【演劇の有効性】の3つのカテゴリーは、共に今も記憶として強く残っているものであるため、《心に残る劇の記憶》という上位カテゴリーに統合した。

#### 5.1.2 現在の生活への影響

劇参加を振り返った時、そこで学んだことが現在の生活に生かされているという具体例があり、人への積極的な関わりを意味する『他者との積極的な関わり』、人の気持ちの理解という『他者の気持ちの理解』、自分の意見を伝える大切さや楽しさを示す『意見の言える自分』、いじめへの鋭い認識を意味する『いじめ観の定着』という概念が抽出された。また、6年前の劇参加が自分の人生にとって大きな意味を持っていたという思いを意味する『ひとつの転機』といった概念も抽出され、計5個の概念が生成された。

そのうちの『他者との積極的な関わり』、『他者の気持ちの理解』『意見の言える自分』『いじめ観の定着』の4つの概念は、「あの劇に参加したから」という質問を踏まえながら抽出したが、現在の生活において役立つものであり、劇参加による自己の変化を意味するものであるため【劇参加からの学び】に属するものとして捉えた。更に、当時の劇参加の意味を改めて問い直した『ひとつの転機』という概念は、今回のインタビューを通しての気づきであるため【新たな気づき】というカテゴリーに属するものとした。

概念及びカテゴリー間の動きとして、④前述の《心に残る劇の記憶》といういじめ撲滅劇参加自体の経験が、『他者との積極的な関わり』、『意見の言える自分』、『いじめ観の定着』に影響を及ぼすと共に、⑤【演劇の有効性】が『他者の気持ちの理解』に繋がるプロセスや、⑥『他者の気持ちの理解』が『いじめ観の定着』に繋がったと考えられる概念間のプロセスも見られた。更には、今回のインタビューで明らかとなった⑦『ひとつの転機』という概念は、過去の劇の経験である《心に残る劇の記憶》を振り返る中、今現在の生活でいかされている【劇参加からの学び】を整理する中で生まれた概念であると考えられる。以下に具体例を示す。

#### 『他者との積極的な関わり』のもとになった代表的な具体例

A：「高校でも友達を作る時、積極的に自分から1人目2人目に話しかけて仲良くなり、2年の時の友達にも積極的に自分から関わっていった。中学の時のようなあの劇のような経験を過ごすのと過ごさないのでは友達への関わり方もたぶん違うと思う。」④

E：「高校の時、知り合いが誰もいない状態で始まって、そこでやっぱりちょっと以前の僕やったら話しかけたりしなかったと思うんですけど、人との関わりが何事に関しても大事だと思ってて、頑張っ  
前の席の子と話しかけて仲良くなって、段々輪が広がって行って・、人と話すっていう練習じゃな



いですけど、劇の経験があったから積極的にいけたかなと思いますね。」④

H：「人との付き合いというか、コミュニケーションが明るくなった。あの劇に参加後、人の見方が変わりグループの人しか付き合わなかったのが、それ以外の人も関わるようになった。劇の練習の時、人見知りなので他の学校の人と話す時、心臓漠々でめっちゃ緊張しました。話しにくかったし、年下の子とかもどう話したらいいか。でも、時間と共にこっちから積極的になれたので、高校でも、友達作り頑張ろうと思った。スキルとしては、笑顔の大切さとか、雰囲気とか・・・学んだかな。」④

#### 『意見の言える自分』のもとになった代表的な具体例

A：「大学になってよく意見を求められる。授業やゼミでも発言したい時は発言するし、自分の思っていることは周りの意見を聞いて比べながら考えて言うようにしてる。そんなふうに見える人は少ないから友達には何で緊張せえへんのって言われる。意見を臆せず言うようになったのも、劇参加から身についたものかも・・・。」④

B：「大学では人数の多い講義では意見は言えないけど、グループだと意見を言う方かもしれない。自分の意見がボンボン出てくるのは撲滅劇のおかげというか、劇での経験がいきたのかなと思う。緊張せず、自分を出せる思いが残っている。」④

#### 『他者の気持ちの理解』のもとになった代表的な具体例

C：「僕は不良役だったけど、疑似体験して、ストレスの発散みたいないじめる人の心情がわかった。中学時代はカッとする時もあったけど、今は冷静に人がされて嫌なことをする前に一回待ってよって感じで、人の気持ちを考えるのが身についた。劇をやってみてわかったことです。軽口を言う時も、これを言ったら傷つかんかなと考える癖がついた。」⑤

F：「自分は顔の表情を読み取れない方だったが、話をして言ってやるとわかる方なので、演劇するまでは、人の気持ちになって考えるのがどういう状況なのか、わからなかったし、演技して人の気持ちになって考えようっていう精神が培われた。」⑤

#### 『いじめ観の定着』

B：「大学の教職教養のいじめの授業には周りの人より関心が強く、自分がした劇のことが結び付きます。」④

E：「いじめのニュースは気になるし無関心ではいられないです。劇に参加していじめには、敏感に余計になったかなって思いますね。」④

D：「自分がいじめられることがなかったんで、劇の中の話なんだろうなと思ってたりしたんですけど、終わってからそれがあるんだなと思いました。劇が終わってから少ししてから変わり始めたんです。前はいじめてる側も悪いけど、いじめられてる側にも何かがあると思ってたけど、今みてるといじめられる原因は、僕からみると小さい事とか多いし、絶対いじめられてる側が悪いわけじゃない。悪いわけじゃない所を拾い上げていじめてる例もあると思います。」④

E：「高校でも皆はいじめやとは思ってないとは思んですけど、1人ぼつんとしているその人を見てたら、僕はそれはいじめちゃうかなってのがあり・・・。」⑥

#### 『ひとつの転機』のもとになった代表的な具体例

A：「人生の中で、劇の体験は修学旅行や体育大会と同じくらい強烈な体験。修学旅行は遊んだだけだったけど楽しい思い出で、劇には学びがある。劇やったことで、そのあとの友達との付き合い方などに繋がっていったのだし、劇や生徒会やってなかったら、今の人生は全然違ってたと思う。」⑦

C：「劇出演で、自分を客観的にみる力がだいぶついたような気がする。どう違うかと言えば答えにくい

けど、15歳の時点で一番大きかった。間違いない。いい体験でした。あれで、人のために何かする感動みたいなものを初めて知ったような気がする・・・。それは生きている上で貴重。ある意味での価値観形成。繋がっている。あれ(劇の参加)がなかったら、普通の人生だったかも・・・。」⑦

E：「いじめとか・・・友達に声をかけることなどもそうです。自分の中ではやっぱり経験として今にいきてるのかなって・・・。」⑦

以上、【劇参加からの学び】と【新たな気づき】は自分自身の変化を意味するものであるため《自己変容の認識》という上位のカテゴリーに統合した。

### 5.1.3 未来に繋がる意欲

現在の生活から未来を考えたとき、職業をどう考えるかといった『進路への姿勢』という概念、将来の仕事への夢や期待を意味する『働く上でのやりがい』という2つの概念が抽出された。それらは働くことへの肯定的な考えが示されたものであるため【働くことへの意欲】というカテゴリーに属するものとした。

概念及びカテゴリー間の動きとして、⑧前述の『ひとつの転機』を今回認識することで、劇の参加が今の自分や進路に影響を及ぼしているという具体例も一部みられた。以下に具体例を示す。

#### 『進路への姿勢』のもとになった代表的な具体例

A：「将来は土木関係につきたい。高校の時から、家というより街づくりに関心を持つようになった。大きな視点で街づくりを考える。将来の夢を実現したいと思っている。」

B：「(いま大学で学ぶ)分野が自分の思いとずれていて、自分は農学でそのまま会社に入るか教師になるかなって思っている。中・高校のどちらかで免許を取ろうと思っている。」

G：「就職は受けるところもいっぱいあるけど、就職の時に中学校の時に頑張った劇の経験なども自分のPRとして話せると思う。公務員試験を頑張りたい。」

表4 いじめ撲滅劇参加の卒業生の過去から現在・未来への影響

上位カテゴリー	カテゴリー	概念	定義	人数
心に残る劇の記憶	安心・受容的関わり	同一目標を掲げるメンバー	同じ目的の生徒会メンバー参加から生まれるもの	3人
		居心地の良さ	自分を作らなくていい、感情を出してもいい、ありのままでもいいという安心感	3人
	ポジティブな感情	感情の高揚(達成感・感動)	劇を発表した後に感じたもの	2人
		自信・自己肯定感	人前でも堂々と話せたり、こんなことが出来たという思い	3人
	演劇の有効性	演じる面白さ	演じるということがもたらす効果	2人
自己変容の認識	劇参加からの学び	他者との積極的な関わり	他者に対して自分から積極的な関わりを持つという体験	5人
		意見の言える自分	自分の意見を伝える大切さ・楽しさ	3人
		いじめ観の定着	いつも考えているわけではないが、ふとした時にいじめ問題に関心を持つ敏感な姿勢	7人
		他者の気持ちの理解	他人の気持ちを理解しながら接する姿勢	2人
	新たな気づき	ひとつの転機	振り返った時に、劇の参加が自分の人生にとって大きな意味を持つという実感	7人
未来への展望	働くことへの意欲	進路への姿勢	自分がつきたいと思っている職業へのあこがれ	7人
		働く上でのやりがい	将来の仕事への夢や何を楽しみとしているか	3人

- C：「なぜ医者になりたいのか、人の助けになる仕事につきたいと思っている。地域医療的な自分でもできそうな身近な人助けになりそうなことをしたい。劇の経験がなかったら医学部にいってなかったかも。あれで、人のために何かする感動みたいなものを初めて知ったような気がする・・・」⑧
- F：「高校2年までは医者になりたかったけど勉強が難しくて・・・、看護師は体力もいるし、薬剤師になりたくても難しく、養護教諭もいかなかった・・・とにかく医療と人と関われるのになりたかった。今振り返っても、劇の3カ月と中学校3年間の生活が同じくらいの重みがあり、あれだけ頑張れたんだからという劇の体験があったから、進路が近づいていた時も「ここまで出来るぞ自分」というのがあり、浪人した時に妥協せずに理想を持ち続けて頑張れた。」⑧
- H：「前から医療とか福祉に興味があって、高校で、特別支援学校にもボランティアに行った。看護師の体験もしたけど、実習をしているうちに看護師に偏っていった。学校では色々なビデオを見る機会があった。(介護士は)看護師よりも利用者ともっと密接に関わっている。」

#### 『働く上でのやりがい』のもとになった代表的な具体例

- A：「街づくりは、自分たちが暮らす街を自分たちで色々考えてやっていく点にやりがいがある。それが出来た時に人に便利になったって言ってもらえるし、実際働いたら今より充実するのかなって感じ。今はとりあえず勉強しようって感じ。」
- C：「地方は結構医者不足もあるので、そういうところで働けないかなと思っている。勉強も頑張らないといけないけど、患者本位の人に寄り添える医者になりたい。中学を終えて、人に尽くせるようになりたいというふうになった。」

このような「働くことへの意欲」は、未来に進路に関する考えを示したものであることから、上位カテゴリー《未来への展望》に属するものとした。

## 5.2 結果図

いじめ撲滅劇参加による卒業生への影響を複数の概念『 』、カテゴリー【 】, 上位カテゴリー《 》に分けた仮説モデルで表す図を示す(図1)。

## 6 総合考察

本研究の目的は、いじめ撲滅劇参加から6年経過した時点での卒業生への影響を明らかにすることである。卒業生8名を対象にインタビューを行い、過去のいじめ撲滅劇参加について今も残っている記憶を抑えそれがその後の生活や人格形成にどのような影響を与えているか、更には進路選択にどのように関わっているかをM-GTAの手法にのっとり分析を行った。その結果、12個の概念が抽出され、それらは6個のカテゴリー及び3つの上位カテゴリーに分類された。

インタビュー時、卒業生にとっていじめ撲滅劇参加は6年前の出来事ではあるが、過去のいじめ撲滅劇への参加を「強く覚えている」と答えた者は8名中4名で、覚えてないという者は存在しなかった。彼らの参加経験の記憶は強弱の差こそあるものの、心の中に残っていることは明らかであった。その中で、心に残る劇の記憶として、注目すべきものに「同一目標を掲げるメンバー」という概念がある。いじめをなくそうというメッセージを届ける目的で始まったいじめ撲滅劇であるが、参加者が「全員が意識高いっていうのがすごく新鮮」と感じとることで、周囲を気にせずありのままの自分らしさを出すことのできる『居心地の

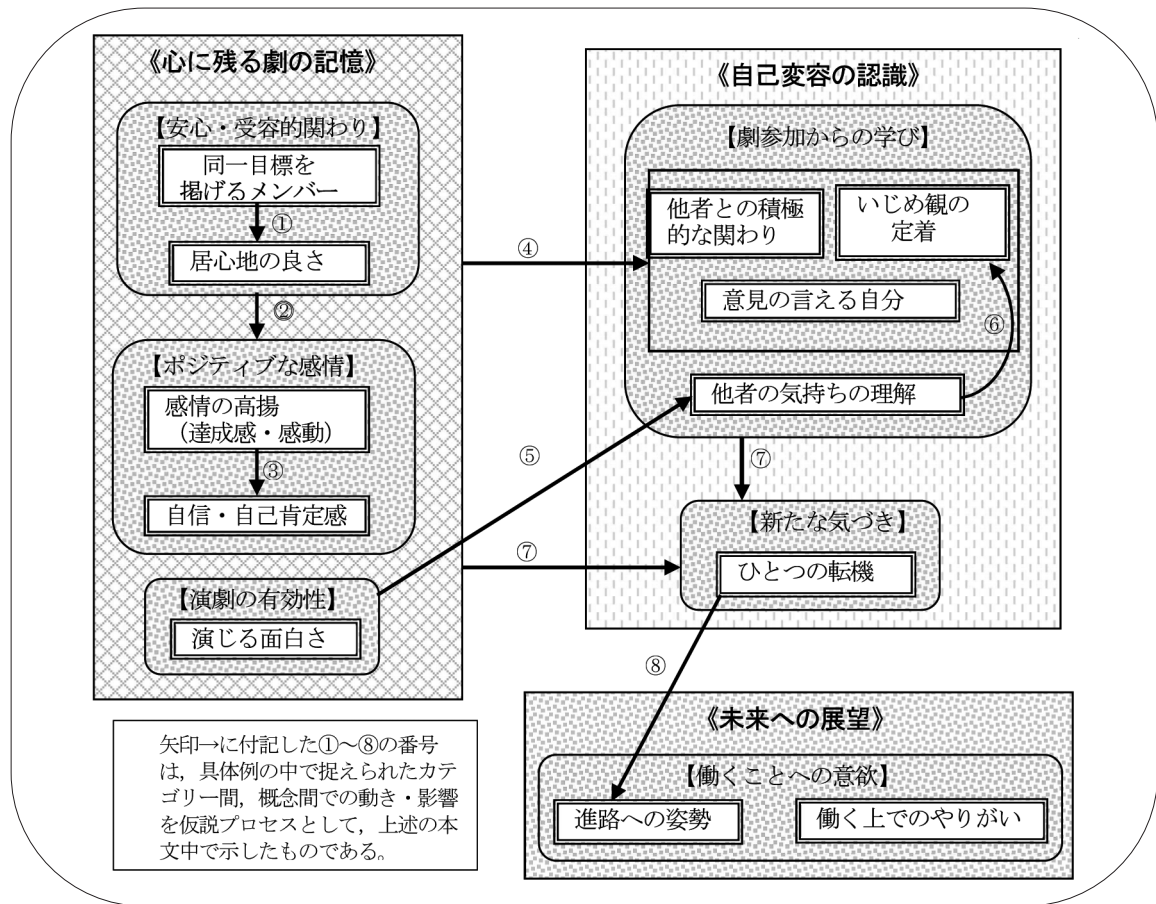


図1 6年前のいじめ撲滅劇に参加した卒業生に見られる過去から現在・未来に向けての影響

良さ』を生み出す場となっていた。「クラス単位でやるとやる気のない人とかが混じってたりする」といった言及があるように、教室は様々な価値観がぶつかり合う場である。更に、思春期の生徒は、自分の本音を出さず人と同じ行動をすることで安心を得ようとするなど(落合, 1998)<sup>11)</sup>、自分がどう思われているか周囲の視線を気にする傾向が見られる。しかしながら、いじめ撲滅劇の練習は「緊張せず、自分を出せる」「先生が毎回アドバイスしてくれ、こうして伸びていくんだなあ、今日はこれが出来たって感じで、先輩とも関係を作って自分も前進して、毎回達成感があった」に代表されるように、体験を共有し共に成長する他の中学生との人間関係を育みながら、自信や達成感をうんでいったことが伺われる。ネット文化が巷にあふれ、バーチャルな人間関係を容易に作れる現代社会において、希薄な人間関係に陥りがちな実態がみられるが、いじめ撲滅劇参加の卒業生たちは、他者と関わりそこで身に付けた自信やスキルをもとに『意見の言える自分』『他者との積極的な関わり』等の自己変容を、その後の生活の中で人間関係づくりにいかしていったことが推察される。

一方、そうした人間関係づくり以外で影響がみられるものとして『いじめ観の定着』という点があげられる。一般的に小中学校に比べて高校以降になるといじめの件数も減るといった言及もみられたが、実際の生活の中でいじめを見聞きした際「自分は周囲より関心を持って考えていると思う」「皆は気づいてないけど僕はいじめとっていて・・・」など、いじめに対する鋭い姿勢が概観された。

そうした『いじめ観の定着』をもたらした要因として、演じるといった活動があげられるだろう。小林(2006)は、演劇を「虚構の世界ではあるが、現実世界の質的体験をさせることができる」活動として捉え

ている<sup>12)</sup>。演じるという活動は、他者の立場に立つことができる活動である。本研究の調査対象ではない2015年度の卒業生からも「練習を重ねる中で、段々といじめられているシーンを見ているだけで辛くなっていった」という声があげられたが(富田.2020)<sup>9)</sup>、劇を演じる中で心が揺れ動き、虚構の世界である目の前で起こっているいじめシーンを自分の問題として捉えていることが感じられる。すなわち、演じることで、虚構ではあるが「真実」の体験をしているような誘因作用が起り、いじめ事象に対して単なる知識の習得にとどまらず、自分ごととして捉え他者の立場に立つことが可能となるものと考えられる。こうしたことから、卒業生において演技を通して生まれた心情が自己の内面世界に落としこまれ「無関心でいられない」姿勢や「絶対、いじめられている側が悪いわけでない」などのいじめ観に繋がっていったことが伺われる。

さらに注目すべきこととして、劇の参加が、進路に影響を与え転機という認識に繋がったことがあげられる。インタビューの初めに行った現在の生活についての質問からは、サークルやアルバイト、学業などを順調にこなして現在の生活を楽しんでいる姿が全員から伺われたが、その点はいじめ撲滅劇との関連で語れるものではない。ただ将来を考えた際に「あの劇の参加があったから、今の自分がある。」「あの劇の参加がなかったら、この大学の進路を選んでなかったかも。」「あの劇のおかげで、浪人した時に妥協せずに頑張れた。」など、過去のいじめ撲滅劇参加を自分の人生の『ひとつの転機』として捉える傾向が8人中6人にみられると共に、その後の進路選択に影響を与えている者も一部いた。杉浦(2004)は、転機というのは自分が変わったことを常に意識して生活しているものではなく、今回のインタビューのような振り返りによって自分が変わったことを再認識しているのであり、転機を経験することで、人は自己を肯定的に捉えることができると述べている<sup>4)</sup>。インタビューの際、6年前の経験を振り返り自分を語ることで、自分が変わってきたことや成長したことを改めて再認識している様相が伺われたが、その転機という認識は、演じるという活動からもたらされたものなのか、他中学校の生徒会メンバーが集まり、一つの劇を作りあげた成功体験からもたらされたものかについては、明らかにはできなかった。ただ、杉浦(2004)があげている転機後の変化の特徴としてあげた「他人受容」「今の自分がある」「積極的行動」「自分らしさ」<sup>4)</sup>と共通点の『他者との積極的な関わり』『自信・自己肯定感』『進路への姿勢』などがみられることから、いじめ撲滅劇参加を卒業生にとっての転機として認識していることが示唆された。

今後の学校現場では、IT・情報化社会の移行が急速に進展し、オンライン授業の導入など新しい授業、教育課程上の変化も起こっていくことが予想される。その一方で、西平(2000)が「自我が健康的な成長を続けるために、感動と感激によって自信を強めていくことが大事」<sup>13)</sup>と述べるように、他者との関わり、協働的な行事の経験などによって集団での取組が与える感動や学びは、将来に向けてよりよく人生を生きたいといった人格形成に影響を与えるものと考えられる。

## 7 まとめと今後の課題

角南(2013)は「中学校現場では(このように)精力的に、日々様々な行事が行われているが、教師の経験に頼るだけで実践の中身を理論的に分かち合う機会は少なく、教育現場に実践的フィードバックをもたらす研究も必要である」と論じている<sup>14)</sup>。研究として、集団活動の短期的な効果を検討した知見は多数存在するが、他者との関わりを持ちながら、一定期間取り組んだ集団活動が、その後長年にわたって個人にどのような影響を与えるかについての研究は非常に少なく、今回、いじめ撲滅劇参加の影響を6年後の卒業生においても検証できた点は意義深いと考える。しかしながら、今回検証された変容の分析は「劇のおかげ

で・・」という言及に着目しつつ行ったが、いじめ撲滅劇参加だけが原因とはいえないものもあり、様々な交絡要因が存在することは否めない。

また、この取組で導き出された結果は、一般の生徒とは違う、いじめ撲滅劇に参加した生徒会メンバーという、いわば特別な集団の生徒を研究対象にしており、ローカルな範囲における仮説的理論といえる。そもそも、M-G T Aは、分析結果を社会的な場に戻されて、そこでの現実問題に対して試されることによって出来栄が評価されると言われており、A市以外での取組として実践された場合でも、同じような仮説理論が見られるかという一般化という点は、本研究では明らかにされていない。今後、違う年度の卒業生への影響を研究課題として継続することで精緻化できるものとする。

### 参考・引用文献

- 1) 高瀬博：中学・高校時における「特別活動（主に学校行事）」に対する大学生の意識について，関東学園大学紀要 *Liberal Arts*(15)，pp.1-16，2007.
- 2) 鈴木翔，岡邑衛，歌川光一，中村豊：秋田大学教養基礎教育研究年報(21)，pp.55-65，2019.
- 3) 河本愛子：日本の学校行事に関する教育心理学的展望 —その教育的機能および発達の意義を問う—，東京大学大学院教育学研究科紀要 52，pp.375-383，2013.
- 4) 杉浦建：転機の心理学，ナカニシヤ出版，2004.
- 5) 富田幸子：いじめ撲滅劇の取組が参加生徒に与える影響 —M-G T A(修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ)による質的実証研究—，日本特別活動学会紀要 第28号，pp.45-54，2020.
- 6) 杉本希映，青山郁子，飯田順子，遠藤寛子：小学校・中学校・高校で受けてきた心理教育の頻度および有効性の認知 —いじめに関する心理教育の影響に着目して—，カウンセリング研究 50(3.4)，pp.143-151，2017.
- 7) 保坂晴奈，青木みのり：青年期において，過去の集団体験が現在の適応状況に影響するプロセス，日本女子大学大学院人間社会研究科紀要 19，pp.59-75，2013.
- 8) 都筑学：青年の時間的展望 南徹弘（編）海保博之（監），朝倉心理学講座3 発達心理学，朝倉書店，p.204，2013.
- 9) 森田洋司：いじめとは何か —教室の問題，社会の問題—，中公新書，2010.
- 10) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチ —質的実証研究への誘い—，弘文堂，2003.
- 11) 落合良行：友人関係の広がり，落合良行（編），中学三年生の心理 —自分の人生のはじまり—，大日本図書，pp.130-155，1998.
- 12) 小林由利子：イギリスのドラマ教育の考察(11) —Jonathan Neelands の実践を通して(I)—，川村学園女子大学研究紀要 17(2)，pp.1-22，2006.
- 13) 西平直喜：自分さがしの青年心理学，北大路書房，2000.
- 14) 角南なおみ：子どもに肯定的変化を促す教師の関わりの特徴 —修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成—，教育心理学研究，61(3)，pp.323-339，2013.